独演

椿の海の記

—もうひとつのこの世を求めて—

第二章「岩どんの提灯」より

原作 石牟礼 道子

出演・構成・演出 井上 弘久

音楽 吉田 水子

作曲（不知火海のテーマ）金子 忍

＜柏崎公演＞

2024年7月20日（土）

15:00 OPEN / 15:30 START / 17:00 END

2024年7月21日（日）

13:00 OPEN / 13:30 START / 15:00 END

会場：

文学と美術のライブラリー 禅文舎

新潟県柏崎市穂波町1番25号 穂波第2ビル2F

題字：栗原光峯　舞台写真：スズキマサミ

椿の海の記

４歳の自分＝みっちんを主人公にした石牟礼道子の自伝的小説（全十一章）。
４歳という、通常は言語化されることのない時期の、自らの自意識の目覚めを描ききって、
世界文学的にも他に類のない奇跡の書。水俣病患者たちに生涯寄り添い続けた
「石牟礼道子という魂のすべてが語られている」（渡辺京二氏）と言われる傑作である。

第二章「岩どんの提灯」の世界

田中優子（江戸文学・江戸文化研究者）

『椿の海の記』第二章の「岩どんの提灯」で、「道子」の生活の場は栄町から水俣川河口の「とんとん村」に移った。「えらい落ちぶれらいた」と、栄町の人たちには言われたものである。しかしその結果、道子の世界が狭くなったのかというと、とんでもない。前にも後ろにも、そして天空にも足元にも、格段と広くなったのである。

遠浅の不知火海には、「不知火」という言葉の由来である漁火の明滅が見える。干潟からはありとあらゆる種類の貝が出現する。父親の亀太郎と一緒に出かけると、魚のあれこれを教えてくれる。しかしそれだけではない。この章の一つの主人公ともいうべき「廃船の竜骨」が登場するのだ。

この廃船が、海の広さと天空の高さ、そして船が経てきた長い時間を眼前に見せてくれる。私は文字で読んだ時、それほどの時空を感じなかった。しかし井上弘久さんの語りを聞いた後、廃船はこの章の中心に位置する特別な存在になった。廃船のへさきには、宇宙さえも見えた。さらに廃船は亀太郎の身体と重なり、その身体によって多様な「石」が見えてくると、そこに「石工」の偉大な存在が立ち現れる。

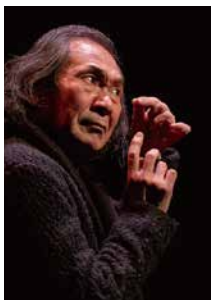
とんとん村に来たのは父の失策のせいであったかも知れないが、道子はむしろここで、廃船の歴史とともに石工としての父を、敬意をもって見出すのだった。その廃船の竜骨すなわち骸骨の暗示する「死」は、ごく自然に、死者を焼く隠亡である岩殿（どん）に重なりながら、物語の主人公は岩殿に交代する。

「岩どんの提灯」という時、その提灯は、死者たちを焼くために水俣川の河口の土手道を葬式のうしろからついて行く時の提灯である。行き倒れやよそ者、いわば無縁仏に近い人びとは土葬ができないことから、火葬するしかないのだった。岩殿の兄は皮を剥いで太鼓や三味線を作っていた。

死者を送る者、動物の皮を剥ぐ者、彼らは職人でありながら被差別の民であった。とんとん村の丘の上には、癩者の徳松どんの一家も住んでいた。道子は世間から蔑まれるそういう彼らを深く心に刻み、親密な感情を持ち続けている。それは祖母である「おもかさま」や、祖母に優しかった栄町の遊女たちへの思いと重なる。

「彼らは自分でもある」―幼い頃にふと思ったその、世間とはどこか相容れない胸の痛みと温かみは、私自身にも、思い当たるところがある。

田中優子 Tanaka Yuko
江戸文学・江戸文化研究者・法政大学名誉教授
江戸文学・江戸文化研究者で、エッセイスト。法政大学第19代総長。現在は同大学名誉教授。2020年に『苦海・浄土・日本―石牟礼道子 もだえ神の精神―』を刊行。女性ならではの石牟礼道子論は説得力に富み、危機的状況を生き抜くための希望を石牟礼道子の著作から導きだす。



撮影：スズキマサミ

井上弘久 Inoue Hirohisa / 俳優・演出家

1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場（太田省吾・主宰）に所属。名作「水の駅」「小町風伝」などで、日本および海外各地の舞台を踏む。1990年より劇団U・フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。チャールズ・ブコウスキーの「町でいちばんの美女」カフカの「変身」で好評を得る。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始。三年をかけて全十一章の上演を果たして後、現在その全国行脚公演を遂行中。

撮影：宮内勝

吉田水子 Yoshida Minako / コントラバス奏者

東京藝術大学、桐朋学園大学研究科卒。躍動感あふれる伸びやかな演奏で、ラテン、シャンソン、タンゴ、映画音楽など、演奏と弾き語りでジャンルの垣根を超えて活躍している。井上とはブコウスキーの「１ドルと２０セント」カフカの「変身」での共演を経て、「椿の海の記」の音楽を担当。時に自身の作曲した楽曲も織り交ぜての演奏で、独演「椿の海の記」には不可欠のパートナーである。
https://yoshidaminacoplanning.jimdofree.com

新潟県柏崎市穂波町1番地25号 穂波第2ビル2F Tel:0257-32-1238

チケット申し込み問い合わせ先

●文学と美術のライブラリー 游文舎
新潟県柏崎市穂波町1番25号 穂波第2ビル2F

TEL 0257-32-1238
MAIL fumiko-neo@view.ocn.ne.jp

公式サイトはこちら▲

●「独演 椿の海の記 ～もうひとつのこの世をもとめて～」公式サイト
https://www.tsubaki-dokuen.com